TENOHASI

てのはし
地球と隣のはっぴい空間・池袋
会報誌第41号　2020年12月10日発行

SOCIAL DISTANCING＋消毒＋お弁当＝コロナ禍での炊き出し

P 2　「見えなかったホームレス状態の方々」にコロナ禍で出会った
P 5　コロナ禍での TENOHASI 炊き出し活動報告
P 8　「ヤバいですよ、仕事全滅ですよ」当事者インタビュー
P12　TENOHASI 活動報告　2019 年度
P23　「助けたい」からではない　女子大生が路上支援に関わるワケ
P25　物資/資金のご寄付ありがとうございました

コロナ禍で現場は一気に多忙となり、会報誌発行が大変遅くなり申し訳ありません。

どうにか年内に発行できました。ぜひご覧ください。

「見えなかったホームレス状態の方々」にコロナ禍で出会った。

新型コロナウイルス感染拡大で緊急事態宣言が出された直後の４月１１日の炊き出しのことです。

生活相談スタッフが「ネットカフェが休業でお困りの方へ」という貼り紙を見たこちら、（下の写真）を見てチラシを持ってきたお困りの方が、そのまま相談に来たとのことです。

男性は４０代。大手電機メーカー工場で人員削減されたけれど景気が残業が倒産失業再就職保険受給期間が切れ、ホームレス状態になった。

「ネットカフェ休業でお困りの方へ」

豊島区役所臨時窓口のご案内
をしています。窓口は、今日明日 9時～
16時半までです!

東京都の要請でネットカフェが休業の方に支援情報を検索して思いもよらぬ死角から支援の手が差し伸べられたとのことです。

緊急事態宣言後、このような初めて生活相談に来たのは、多くの方が生活困窮者の路上生活者の経験がなかったこと。

ここ十数年間の動きを振り返ってみます。

私たちが一目見てホームレス状態の人々と分かる状態の生活者は一目瞭然でしたが、ここ十数年間の動きを振り返ってみます。

２００６年に３千人を切ったのは２００８年のリーマンショックで３０人だった。２００９年に２万５千人に減少し並ぶ人数は、２００５年に２０００人に迎えた。２００６年の３０人から２００９年に２万５千人に減少し並ぶ人数は、２００５年に２０００人に迎えた。２００６年の３０人から２００９年に２万５千人に減少した。

TENOHASI の炊き出し並ぶ人数は、２００５年に２０００人に迎えた。２００６年の３０人から２００９年に２万５千人に減少した。

減った理由としては

① 自立支援センターなどの施設が作られた。

② リーマンショックと年越し派遣村を機に生活保護

が多少あるべき運用に近づいた。

③ 各地の支援団体が様々な取り組みをした。

など曲がりなりにも政策と支援の取り組みが効果を上げてきたことが挙げられます。しかしそれに劣らず大きな要因は、

④ 公園や道路・河川敷などでの追い出しが進んで居場所が奪われていった。特に東京はオリンピックを控えて追い出しが進んだ。

⑤ 多くを占めてきた元・肉体労働者が高齢化して亡くなった。

という厳しい現実があることが指摘できます。

それでも「見えるホームレス状態の人々」がゼロにならないのにはいくつか理由があります。

① まず、福祉事務所でしばしば浴びる「泥棒を見るような」冷たい対応。「保護を受けたいと言ったら福祉の職員から『甘えないで仕事してください』と言われて相手にされなかった」という声は今まで何度も聞きました。「交通費を出すから田舎に帰ったら」と言われることもしばしば。田舎の親族に頼れるならとっくに頼ってます。

② 次に、生活保護を申請すると東京と近県ではほとんどの場合宿泊先としてビジネスホテルが経営する施設に紹介されることが多い。貧困ビジネスとは部屋の共同生活と他人と相部屋ではなく、「こんなトレスフルな生活が利用料として徴収されて殆どが生活保護費のうちに、特に路上生活者は路上に戻る人が多い。この状況に対して私達は「ハウジングファースト」＝「誰にでも最初から安心できる普通の住宅を提供し、伴走的支援をする」支援方法を提案し、2016年から実験的な実践を始めています。安心できる住まいで心身が回復し、路上から脱出できた方は今まで数十人にのぼります。

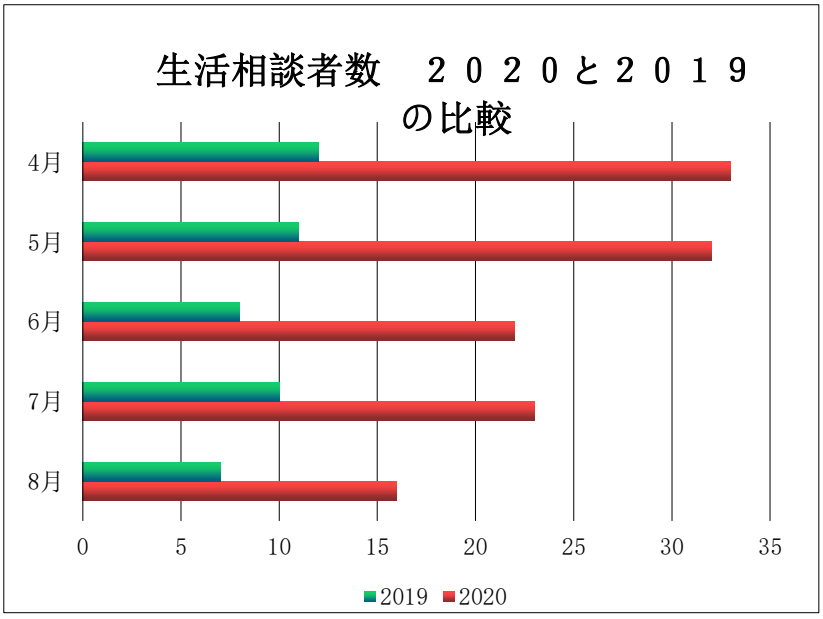
それらの成果もあり、池袋の夜回りで出会う路上生活者はピーク時の180人台から40人台にまで減少しました。

「見えるホームレス状態の人々」はこのままどんどん減って、私達の活動もいつか終わらせることができるのではと期待し始めたのですが、このコロナ禍が「見えないホームレス状態の人々」を一気に可視化させました。

昨年は月平均10人でしたが、4月5月は30人を超え、その後も高止まりです。そのうちの半数以上がコロナの影響で仕事も住まいも失った方々でした。

「ホームレスは怖いから近寄るなと親から教わりました。金がなくなって野宿せざるを得なくなったときもホームレスのいる公園は避けて誰もいないところで寝てました」

ENOHASIの生活相談にT初めて来られた方のグラフで、上がが昨年、下が今年です。グラフを御覧ください。



新たに相談に来られた人の数。上が昨年、下が今年

生活をしてきた人間関係の構築に難しさを感じていました。

２０１６年末、２年ぶりに東京都内の３００ネットカフェ難民となった。「１日目は公園のベンチで寝ようと思ったが、夜中に見知らぬ人に声をかけられ、怖くて眠れなかった。２日目からは、ネットカフェの個室を利用することにした。１時間１００円で、シャワーもあるし、安心して眠れる場所だと思った。」

当時の生活費は、ほぼ全額ネットカフェの利用料に消えていた。「食べるものは、コンビニのおにぎりと水だけ。お金がなくなるのが怖くて、外に出ることもできなかった。」

ある日、ネットカフェの受付で、スタッフから「ここを出ていってください」と言われた。「理由は、他の利用者からクレームが出たから、とのことでした。」

その夜、行き場を失った。「公園のベンチに戻ったが、寒くて眠れなかった。朝、駅のトイレで顔を洗ったとき、鏡に映った自分の顔を見て、涙が出てきた。」

翌日、ハローワークに通うようになった。「求人は多くあったが、住所不定では応募すらできなかった。履歴書に書く住所がない、という壁にぶつかった。」

ハローワークの職員の紹介で、生活保護の申請を勧められた。「最初は、恥ずかしさと、申請していいのかという迷いがあった。でも、このままでは本当に死んでしまうと思って、勇気を出して申請した。」

生活保護の申請から、ケースワーカーとの面談が始まった。「ケースワーカーは、私の話を真剣に聞いてくれた。責めるような態度ではなかった。」

ケースワーカーの紹介で、簡易宿所に入ることになった。「ベッドは狭いが、鍵のかかる部屋だった。ネットカフェとは、安心感が全然違った。」

簡易宿所に入ってから、就職活動を再開した。「履歴書に住所を書けるようになったことが、大きな変化だった。面接の回数も、増えた。」

２０代男性の場合、ネットカフェ難民から抜け出すまでに、平均して３ヶ月程かかるケースが多い。

（清野賢司）

コロナ禍でのTENOHSI炊き出し活動報告

TENOHASIでは、通常の炊き出しを2月第4週まで実施していましたが、コロナ感染拡大により、スタッフや並ばれる方の安全を考え、従来の炊き出しを中止し、お弁当の配布を継続しています。

私は、昨年1月からドライバーとして参加していましたが、現在はLINEグループでのスタッフ配置調整・現場での取りまとめ、終了後のフェイスブックでの情報発信のお手伝いをさせていただいています。

今回の記録を書き出すと

3月7日
TENOHASI拡大理事会により調理炊き出し・一般ボランティアの募集の中止を決定。

3月14日（コロナ禍の炊き出し第1回）
スタッフの手作り弁当を配布。世界の医療団（MDM）によるマスク・消毒用アルコール・石鹸等の衛生キットの配布開始。（下の写真）

3月19日
東京新聞に「炊き出し継続への奮闘」掲載。

3月28日（コロナ禍第2回）
始めて業者さんに発注した弁当配布。普段の炊き出しなら1万円あれば炊き出しができるのに、弁当を買うと10万円もかかることに驚愕。しかし、まだこの頃は春になれば普通の炊き出しができると思っていた。

4月3日
新型コロナウイルス感染拡大で困窮者がホームレス化することを懸念して支援団体が連合して東京都に申し入れ。NHKニュースに。

4月4日
オンライン会議にて今後の炊き出しの方法を決定。調理場や公園の密を避けるために普通の炊き出しに戻すのは延期して、弁当継続を決定。

4月7日
緊急事態宣言

4月11日（コロナ禍第3回）
休業要請で休業する焼き鳥「鳥ひろ」さんから鶏唐揚げのおかず（右の写真）を格安で提供していただき、スタッフが詰めたアルファ米の弁当とともに配布。

もらう人が距離を取って並んでもらうために地面にチョークで印をつけ、感染防止のためマスク着用、アルコール消毒の徹底・スタッフでの配置を事前に決めてＬＩＮＥで共有する等、情報共有の本格化。

５月９日（第５回）
弁当に加えて、パルシステム提供のパン・バナナ等の提供開始。（左の写真）

５月２０日
毎日新聞に、テノハシがアベノマスクを配布している記事掲載。多くの方からマスクの寄付をいただく。

５月２５日緊急事態宣言解除
鳥ひろの営業再開に伴い、おかずの提供終了。アルファ米の在庫もなくなったため、新たな方法の開拓が必要に。

６月１３日（第７回）
新たに開拓した弁当屋さん（つるや庚申塚店）に発注したお弁当を３００食を配布。雨のため並んだのは１６０人。多くの方が二つ目を持ち帰った。

７月２５日（第１０回）
スタッフが感染した場合に備えて、コアスタッフによる班長制の導入・相互補完開始。
公園スタッフ数を削減・「ボランティアスタッフによる炊き出しボランティア日記」ブログの再開。

８月８日　（第１１回）
感染防止のため夏祭りは中止。代わりに、この１年間に亡くなった方の祭壇だけ設置。（右下の写真）
熱中症予防と健康のためにキンキンに冷やしたスポーツドリンク・虫除けスプレーをマスクなどの衛生キットと配布。

８月２２日（第１２回）
この日も３５度を超える猛暑の中、２２１人が並ばれた。

９月１２日（第１３回）
雨の予報のためお弁当を２２０食から２００食に減らしたが、雨は少しばらついただけで２０２人が並ばれ、弁当を渡せなかった方には予備用のおでんパックや缶詰をお渡しした。
コロナが収まるまで新規ボランティアの受け入れを制限していたが、コロナ収束が見えない一方でボランティアに参加したいという方からのメールが相次いでいるので、次回から一回４人までの受け入れを決定。

９月２６日（第１４回）
弁当を２２０食用意したが２４４人が並ばれ、スタッフがスーパーに走って足りない分を購入。二つ目をもらうために並び直してもらうためのスペースも限界。会議を開いて、次回から「弁当は多めに購入。一人一つを徹底して、速やかに解散してもらう。弁当が残ったらスタッフが他の公園などで配布する」と決定。

１０月１０日（第１５回）
あいにくの雨で、並ばれたのは１６６人。用意した弁当は２２０食。残った弁当はスタッフが持ち帰って池袋や地元で配って回った。

１０月２４日（第１６回）
晴天の予報だったので２６０食の弁当を用意。しかし弁当を求める人の列はどんどん伸びでなんと２７３人。今年度最多を更新した。

ざっと以上となります。

１０月には並ばれる方が２７０人を突破し、その勢いは今も続いています。その方々に、お弁当、パルシステム提供のパン・バナナ、世界の医療団のコロナ衛生キット、衣類を配布しています。衣料を効率的に配布するため、少数のスタッフで、あらかじめ衣類の仕分けと整理を行っています。

夏には収束することを期待していたコロナ禍ですがとどまるところを知らず、炊き出しは現在もソーシャルディスタンスを確保しながら行っています。（左の写真）

２月までの通常炊き出しでは、一万円ほどの食材費で出来ていましたが、現在は弁当等の購入で毎回十万円を超える経費が発生しています。

コロナ禍で、我慢しなくてはならないものが多々あります。調理場でのベテラン勢のおばさん方とのおしゃべりや、初参加者との交流。公園での当事者同士の団欒（コーヒーサービスや、「ほっとも」も中止しています）。

スタッフ同士や、当事者の方とのおしゃべりや、一緒に食べる「まかない飯」

そして何よりも、ほかほかのご飯にかける、野菜をたっぷり使ったぶっかけ汁。これらは、当事者の方々はもちろん、ボランティアにとっても大切なものだったことを痛感しています。

しかし、悪いことばかりではなく、この間、ＴＥＮＯＨＡＳＩも新しい時代の風を取り込みました。

・オンラインによるメンバー間の会議（総会も初めてオンラインで行いました）。

・ＬＩＮＥグループによる事前の情報共有とマニュアル化。

・スタッフ間の仕事・配置の見える化や、名札の導入により顔と名前の見える化。

・パルシステムの協力によるパン、バナナ等の配布。

・他団体（新宿ご飯プラス）との情報交換・配布手法の取入れ。

・雑踏警備の経験スタッフによる整理誘導手法・資材の取入れ。

・ドライバースタッフの増員、複数の班長による公園での運営等、活動継続のためのスタッフのバックアップ化。

・テントを使っての雨天での衣類配布の実施。

・ＳＮＳを活用した情報発信

またマスメディアへの露出が増えたことにより、ＴＥＮＯＨＡＳＩの活動や路上の方の存在の認知度もアップしました。

世の中では、ソーシャルディスタンスと叫ばれていますが、ソーシャルディスタンスではなく、体は離しても心はそばにいる、フィジカルディスタンスでやっていかなくてはならないと思います。

小雪が舞う３月の第１回目から、はや半年以上がたちましたが、一向に新型コロナの収束が見えません。今、かつてのリーマンショックを上回る不況が訪れていると言われています。

皆様からのご支援により、ＴＥＮＯＨＡＳＩは炊き出しを継続していきます。

私もコロナ禍が収束し、単なるドライバーとして参加できる日まで、この体制をお手伝いしたいと思います。

（大塚教徳）

ヤバいですよ、仕事全滅ですよ。

当事者インタビュー

Kさんは今年40歳。がっしりした体型の、快活な男性です。その彼がコロナで追い詰められ、いま再起を図ろうとしているその状況を伺いました。

今日はよろしくお願いします。生まれはどこでしたっけ。

東北の〇〇県です。

いいところですよね。温泉も多くて(笑)。学生時代はスポーツを？

はい、野球を。小中高とずっとショートで、高校は1年の途中からレギュラーでした。先輩にはやっかまれましたが。

ですよね。でも、モテたでしょ。

そのころは野球部が人気だったから、モテましたよ。でも、チャラチャラはしてなかったです。野球バカでしたから。その頃には珍しく髪型自由な野球部だったんですが甲子園にあこがれてたから自分だけ坊主。最後の年は新人戦で県ベスト16までいったんです。でも夏の大会が1回戦負け。

残念でしたね。高校を出てからは？

父が左官屋だったんで父と働きました。でも「家族と一緒だと甘えが出る、よその飯を食おう」と思って二十歳過ぎにガス溶接の会社に入りました。その社長が気に入ってくれて「ずっとここでやってくれ，離さないよ」って言ってくれたんです。

ガス溶接というのは・・・

（しばらく溶接の解説を楽しく聞きましたがここでは割愛）

それがどうして東京に来たんですか？

借金問題です。自分の借金じゃないですよ。友達から頼まれて自分の名義で借りたんです。友達のお母さんが病気で、医療費がかかるんで車検代がないって言われて。25歳の時でした。友達が自分で返すはずだったんですが、しばらくしたらうちに請求書が来た。最初20万くらいだったのが雪だるま式に膨らんで100万くらいになっていて、友だちもどこに行ったかわからない。しょうがないから自分で返していたんですけど、もう完全に人間不信ですよ。

「なんでこんなに働いてるのにみんなもってかれるんだ」って。やっとこさ返した後、「もう誰もいないところで勝負しよう、東京で一人で生活しよう」と思って上京したんです。

それがいつ頃ですか？

東京に来たのが2017年ですから37歳の時です。貯金が40万くらいあってそれでアパートを借りようと思っていたんですが、新宿で部屋探しをしようとしたときに一瞬で盗まれたんです。ショックでした。完全に計画が狂いました。ちゃんと就職しようと思ってたのに・・・

金が無いから日払いの仕事して、ネカフェに泊まるしか

ないじゃないですか。

そこからネカフェ生活が始まったんですね。仕事はどんなのを？

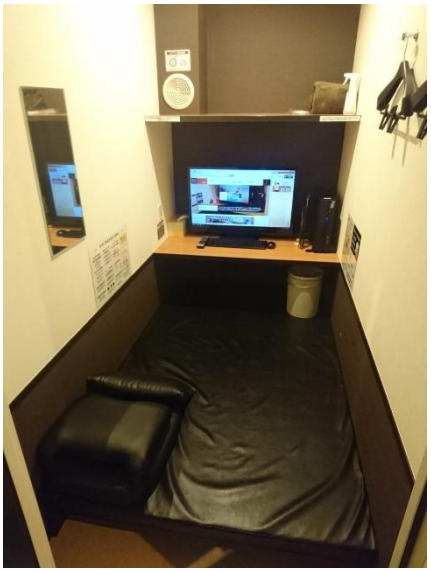
　最初は運送会社の倉庫内作業や、居酒屋のフロアとか・・溶接はなかったですね。やっているうちに自分に合ってるのは建築だなと思って、派遣でいろいろな現場に行きました。それなりのスキルはあるんですよ。

ネカフェ生活はどうでしたか？

　ネカフェ生活・・田舎でアパート生活だった自分にはあこがれでした。テレビもついてるんだ、２４時間やってるんだ、って。ちょっと嬉しかったです。

　でも、田舎にいるときよりもすごい勢いで金が無くなるんです。それに他の客のにおいが気になってくる。お風呂入ってるのかな、とか。

　ダニとかも経験しました。ダニに刺されるなんて田舎では経験したことがない。



東京はどうでしたか？

　何よりも東京は人が多いです。そして空気は汚い。新宿渋谷池袋、どこも異様な匂いがします。いまは気にならなくなりましたけど。

　でも何でもある。真夜中でも歩けるとこに吉野屋や、すき家がある(笑)。

アパートは借りられたんですか。

　いいえ。アパートを借りようと思って、１年で２０万くらい貯めたんです。ところがある時突然、喘息の発作で倒れたんです。酸素がいってないから手が真っ白で、名前も言えないくらい苦しくて。もともとアレルギー体質だったけど、東京の空気で悪化したんですね。

　救急搬送されて入院したんですが、保険証がないから入院費を払ったら貯金はなくなりました。

　退院して仕事にいったらまたおかしくなっちゃいました。マスクしているだけでも首を絞めつけられているよう。エレベーター乗ると酸素が少ないと感じて「息が苦しい、死んじゃう」と。薬局で酸素スプレーや肺をきれいにするサプリメントを買い込みました。

　その頃、ネットカフェは２４時間いられてダニがいないところを選んで一日４９８０円。食費や薬代が２千円くらいですから、３０日で最低２０万円以上かかります。

　仕事がある時は月に２５日朝晩とから働いていましたが、体調を崩すと休むしかないのでお金がちっとも貯まらない。

　さびしかったかな。だれに愚痴を言えない、でも騙された自分が悪いので、一人でいいやと思っていた。こんなもんだろうと。

そこにコロナがやってきた？

そうなんです。1月に中国でコロナが流行ってるというニュースがでましたが、関係ないと思ってた・・・。

2月、あれっと思った。仕事がへってきた。

3月、仕事が激減しました。

4月、ついに仕事が壊滅しました。前も相談したことのあるTENOHASIに相談したら、都がネットカフェ難民のためにビジネスホテルを用意したと聞いて、申し込みました。すごく緊張しました

よ。役所なんて行ったことないですもん。

二日後に、東京チャレンジネット（ネットカフェ暮らしの人のために3ヶ月無料で宿泊先を提供する事業）で新宿のホテルに入りました。

そうでしたね。ホテルはどうでしたか？

よかったですよ。自分だけの部屋にお風呂トイレつきですからね。シャンプーとリンスを浴びるほど使って髪を洗いました。ネカフェでは出来なかったんで(笑)。ご飯も毎食お弁当がでる。幸せで、有り難かった、嬉しかった。

ホテルから仕事に行ったんですか。

行きました。でも、仕事がありません。何日か働けたかと思うとまた切れる。こんなに仕事がないのは経験したことがない。ヤバいです。

そしてついに5月には仕事が全滅しました。

毎日朝から晩までスマホを見つめて、仕事を探しました。

LINEだったりメールだったりで募集があるんですが、一瞬で定員いっぱいになるから全く気が抜けない。やっと仕事にありついて喜んでいくけど、続かない。

コロナになる前はいくらでもあったんです。日勤でも夜勤でも選び放題で、どこの会社からもぜひ来てくれって言われてたんです。それが全く消えました。

チャレンジネットはご飯はくれるんですがお金はでないから自分で稼ぐんです。生きて行くには現金が必要です。携帯代がかかるし洗濯も新宿だと1回千円かかる。仕事に行くには交通費もドリンク代もかかる。でも、ヤバいくらい仕事がないんです。

これが1年2年続くとなれば、この先どうなるんだろう・・・って、どんどん不安になりました。チャレンジネットでご飯と住む場所は与えられているけど、終わったな・・・・って。

前はネットカフェ生活でしたが仕事はあったんです。今回はホテルにいられるけど仕事も貯金もない。すごいストレスです。ギリギリで過ごしても何も面白くない。

だから支援者の皆さんから生活保護を勧められても渋ってたんです。仕事が出てきたらばりばり働きたい。稼いで焼き肉を腹一杯食いたい(笑)。

それからどうなりましたか？

緊急事態宣言が解除になっても仕事は全く戻ってこなくて、7月の始めに手持ちのお金がゼロになりました。これでは仕事も行けない、携帯も払えない、洗濯も出来ない。ついに白旗を揚げて、生活保護を申請しました。自分みたいに若いのが保護を受けられるのか不安で何回も支援者に何度も聞きました。でも支援者に付き添ってもらったせいか保護はあっさり認められて、新宿から上野のホテルに移ることになりました。

とりあえずよかったですね。

でも、早く自分のアパートを借りて、そこから仕事に行きたい。

いま、福祉事務所もアパート借りてくださいって言ってくれているので探しているんですが、「生活保護です」って言うとほとんどの大家さんが貸してくれないんです。保護でアパート見つけるのこんなに苦労するとは。

そうなんですよ。審査通らなかったりするとへこみますよね。でも、いつか見つかりますから。

どれが正解だったのかな。生活保護で生活費をもらうのは有り難いけど、ストレスが溜まる。仕事行かないと身体が重くなるだけ。好きな服を買ったり、好きなものを食べに行くこともできない・・・

これからのことはどう思いますか？

オリンピック委員会の森さんが「コロナが1年続くとは思えない」といってますが、続きますから。小学生でもわかる。外出自粛になって感染が減った、じゃあって解除してたらまた感染者増えますよ。経済を動かしたいのだろうけど、多少死んでもいいから経済優先という考えだったのか？

いろいろな考えがあるんでしょうけどね。

まだワクチンとかないのに・・でも株価だけが上がってる。お金持ちがますますお金持ちになる仕組みだったみたいです。

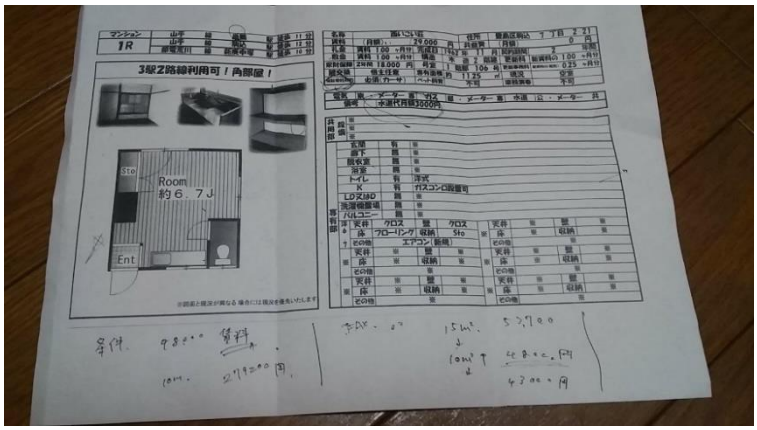
ご自身の希望は？

仕事が欲しい。それだけです。きつくてもいいから、自分の出来る仕事をしたい。

その後Kさんは無事アパートを借りることが出来ました。しかし仕事はまだ回復せず、探し続けています。

インタビュー　清野賢司

＊写真はイメージです



TENOHASI 活動報告

２０１９年度

順調に人数が減っていたのに
コロナ禍で逆戻り

２０１９年度、炊き出しに並ばれた方は平均１６６人まで下がりました。５年前の２２４人と比べると約２５％減少です。

＊下のグラフをご覧下さい。

また、毎週の夜回りで出会った路上生活の方の平均は５９人で、５年前の９１人と比べると約４０％の減少です。

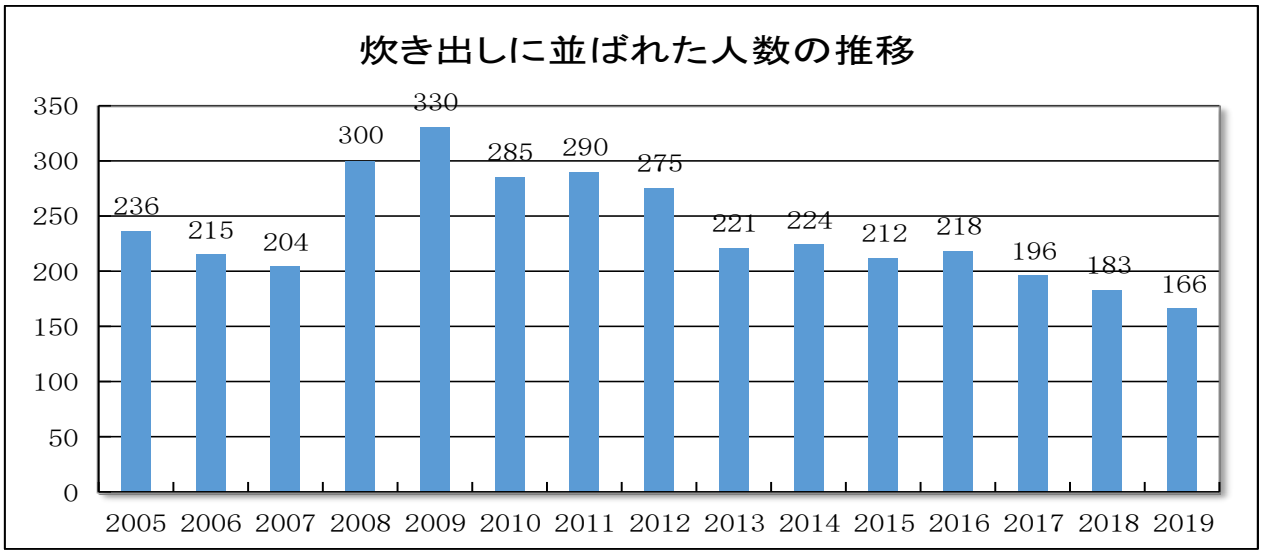
路上生活を余儀なくされている人が減少したことは誠に喜ばしいことです。しかし、喜んでばかりはいられません。

まず、支援実績からすればもっと減っているはずです。新たに路上生活になった人、一度は生活保護や仕事で路上を脱出したけれど、再び路上生活に戻った人が相当数いらっしゃると言うことです。

また、池袋は大規模な再開発が進んでおり、公園やビルの改修で路上生活の方が寝られる場所がどんどん減っています。排除が進んだことで、路上生活者がますます見えなくなって居る現状があります。

そしてこのコロナ禍です。２０２０年４月から１０月までの半年の炊き出しに並ばれた方の平均は２１０人で３年前の水準に戻ってしまいました。

だれもが心安まる家と居場所をもつ社会はいつ実現できるのか？その日が来るのを目指してこれからも活動していきます。



炊き出し調理班

毎月第２第４土曜の炊き出し調理班の集合時間は午前１１時。ミーティングにて作業内容や注意事項を確認したあと、５つのグループに分かれて作業を開始します。

①調理器具を洗う。

寸胴鍋や炊飯釜などの調理器具を丁寧に洗っていきます。衛生的な食事作りをするために、気を抜くことができない作業です。

②米を研ぐ。

１回の炊き出しで提供するご飯の量は、４０～４８リットル。この量の米を研ぐのはかなりの力仕事ですが、美味しいご飯を炊き上げる為に大切な作業です。

③野菜・鶏肉を切る。

３００～４００食分のスープに必要な野菜を切るのは一苦労です。玉ねぎを切っている時は、隣の部屋にいても涙がでてくるほど。それでも、食事を召し上がる方が食べやすいように、程よい大きさで丁寧に切っていきます(写真)。

④ご飯を炊く。スープを煮込む。

１５０～１８０リットルのスープを寸胴で煮込んでいきます。プロパンガスを使用するため、安全面には細心の注意を払います。最後の味付けは、みんなで味見をしながら。意見を出し合って、参加者全員の心を込めたスープの完成です。

＊トラックドライバー班

調理に使用する食材や配食に必要な器などを買い出しに行きます。そして調理終了後、調理班の心を込めた料理をトラックで公園へと運んでいきます。

★もっと美味しい食事を

炊き出しのメニューは主に野菜がたっぷり入ったスープ（醤油味か味噌味）とご飯。夏祭りや年末年始にはそうめんやお雑煮なども作りますが、「もっと美味しい食事を食べてもらいたい！」ということで、今年度はいくつかの新メニューに挑戦しました。

・カレー風味の野菜スープ
・塩ちゃんこ
・大根と人参のきんぴら
・中華丼（次ページの写真）

★活動にも楽しさを

調理班で大切にしているのは、和気あいあいとした雰囲気作り。衛生面や安全面で注意しなければならないことは沢山ありますが、「雰囲気作り」は活動を維持する上で大切なことだと思っています。

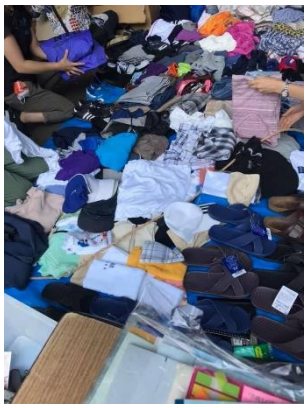
１月には、「６０歳の誕生日に初めて参加してくれた方にサプライズでケーキをプレゼント！」なんてこともありました。

現在コロナ禍で調理は中止していますが、終息したら今後も楽しく調理活動をしながら色々な事を感じ取ることができる時間にしていければと思います。

（郡司晋）

炊き出し公園班

①衣類配布
１６時半から配ります。



１回に並ばれるのは３０～５０人ぐらいで１人１点ずつ、もっとほしい方は最後尾に並んでもらい、１７時過ぎにはフリータイムにして使うものだけ選んで１７時２０分頃に終了です。

②ドリンク配布
こちらも１６時半に開始です。冬はホットコーヒー、夏はアイスコーヒーや熱中症対策のスポーツドリンクを配ります。

③　配食
並ぶ人は１７０人ぐらいで、２杯目をもらう人は１００人くらい、３杯目も数十人くらいになります。白ご飯が残ったらふりかけ弁当にして持ち帰ってもらいます。

④　ボランティア人数と配置
・ご飯をよそう
２カ所に４人
・どんぶりをよそう人に渡す
２人
・ご飯のどんぶりを手渡しする　５人
・ご飯に汁をかける　３人
・お茶を渡す　４人
＊経験者がいるときは各ポジションに入ってもらい初参加の人に教えてあげます。

新型コロナウイルスで、ネットカフェ生活の日雇い労働者の居場所がなくなったために炊き出しに集まって来る人が増えている状況です、感染防止のため並ぶ人の間隔をあけ、マスクを配布しています。
（渡邊基延）

医療相談

①実施回数
通常炊き出し　２４回
越年越冬期間　　４回
②相談者数
延べ１０７９人
紹介状発行数　１４通
③ボランティア延べ参加人数
医師７７人、看護師５７人、
ロジ・サポート１１０人
※医師、看護師、ロジそれぞれ約１０人程度のボランティアが持ち回りで参加
④医薬品の寄付
風邪薬、湿布類、トローチ、細粒胃薬
⑤医薬品購入経費
約４８万円
（夏祭りで配布した虫よけスプレー約１２万円を含む）

２０１９年度も沢山のボランティアさんに支えられ、無事に医療相談会を実施することができました。
１回の相談者はおおよそ４０人でリピーターの方も多くおられました。
訴える症状としては、風邪やアレルギーによる鼻水や咳、胃腸の不調や腰、膝の痛みが多かったです。
それから季節により乾燥や蒸れによる体のかゆみを訴える方もいらっしゃいました。
毎回血圧を測ってお薬手帳に記録している方が多くいらっしゃいますが、年齢にかかわらず血圧が高い傾向の方が何人もおられました。やはり過酷な野宿生活やバランスの取れた栄養のある食事を取れない状況が身体にも影響しています。

⑥医師の紹介状及び福祉事務所への意見書
年間で１４通発行しました。紹介状の半数は 高血圧について精査・加療をお願いするものでした。路上生活で健康保険のない方が多く、そうした場合、ソーシャルワーカーと一緒に相談に乗り、生活保護を利用して医療に繋がるお手伝いをします。
また、家のない方が生活保護を申請すると、首都圏ではほとんどの場合、相部屋の施設への入居を求められますが、医療相談でお話を伺う方は全員と言っていいほど個室を希望されます。本人の訴えに加え、医療者から見ても個室に住まうことが望ましいと判断できる状態の方も多く、そうした場合には福祉事務所宛ての意見書を発行し、生活保護申請の際に渡してもらいます。２０２０年の初旬に相談に来られた方は、まさにこの様なケースで、当初、福祉事務所では個室は用意できないと断言されたところ、この意見書により個室の施設へ入居することができました。この様なやり取りが発生せずとも、誰もが安心安全でプライバシーの守られる住まいへアクセスできることが必要で、ハウジングファースト型の支援はこれを可能にするものだと痛感した一幕でした。

⑦コロナウイルスへの対応

２０２０年２月には国内で新型コロナウイルスの感染拡大が懸念され、医療班ではすぐに感染症の情報の発信をしようと相談し、医師、看護師にご協力いただいて感染予防ちらしを作成しました。まず新型コロナウイルスとは何なのか、症状はどういったものか、予防するにはどうしたらいいか、マスクの正しい使い方、そしてどういった場合に相談や受診をしたらいいか。福祉事務所や保健所とも相談し、医療保険のない方が相談できる方法を記載しました。

路上の方は感染を予防するための物資も手に入りにくい状況も鑑み、新型コロナウイルス感染予防キット（チラシ、マスク、消毒液、液体石けん、ティッシュ、カイロ等）の配布も開始しました。物資のない時期でしたが３月の早い段階でアルコール消毒液やマスクのご寄付を頂き、医療班でストックしていたマスクも合わせて２５００枚ほどあったため可能になったことです。

たくさんの方からマスクのご支援を頂いたのに加え、世界の医療団では新型コロナ感染予防対策活動への助成金を獲得できたため、新型コロナウイルスが終息するまで、長期間に渡っての感染予防啓発活動を続けることができそうです。

また手作りマスクのご寄付も沢山いただき、路上の方達のファッショナブルな装いを楽しみに予防キットの詰め作業を進めました（笑）。実際にみなさんそれぞれのマスクをとても気に入っておられ、お渡しする私たちも笑顔になりました。

最後になりましたがご報告があります。ＴＥＮＯＨＡＳＩ発足当初からかれこれ２０年近く医療相談を支えてくださった「カトリック池袋医療班」という医療者グループがあります。これはカトリック医師会東京支部の先生方が中心となった団体で、人・物・資金すべてにおいて活動を支えてくださり、医療相談会を続けてくることができました。

この度、カトリック池袋医療班は２０１９年１２月をもって活動を終了され、その活動は私たち世界の医療団が引き継ぐことになりました。そして医療班の今後の活動のために、１０７万３３９６円のご寄付を頂きました。ここに改めて、長年にわたる活動を支えてくださった先生方に、感謝をお伝えしたいと思います。ありがとうございました。

写真は２０１９年１１月にあさやけベーカリーで行った交流会です。水野先生が医療班の歴史をお話くださいました。また改めてご報告の機会を頂けたらと思います。

（世界の医療団　武石晶子）

ほっと友の会（お茶会）

★活動

毎月第４土曜の炊き出しの日に、みんなでお話をする活動をしています。公園内に段ボールを敷いて輪になって座ります。はじめにコーヒーや手作りのお菓子を食べ、歌を歌い、ゲームをします。そうして場があたたまった後、落ち着いた雰囲気の中で話し合います。お互いの話を聴き合い、わかち合う時間です。昨年度は、１回あたり平均約１０名の参加でした。

★感謝

毎回の活動は様々な方々からのご支援によって支えられています。てのはしや世界の医療団、カトリック池袋医療班の皆様いつもありがとうございます。また、ほっと友の会に 参加してくださる皆様、ありがとうございます。

★昨年度良かった点と足りなかった点

昨年度は全体の参加人数は減りましたが（一昨年度より１回平均２，４人減）、ほっと友の会(以降「ほっ友」)をとても大切な場と思ってくださる方が増えた年でした。

ほっ友の輪の中にはなかなか入らないものの、長年そばで見ていた方が輪の中で笑顔で過ごされるようになりました。ほっ友を心の居場所と感じて長く参加されている方から「ここはいいよ」と紹介されて、一度でその良さを感じてくださった方もいました。

そのうちのお一人は「この場はどのような処方薬よりも落ち着きます。こういう場を本当にありがとう」とおっしゃっていました。私たちもこれからも長く続けていきたいと思う、ありがたいメッセージでした。

一方、昨年度、足りなかったことは、新しい方へお声かけができなかったことです。スタッフが少なくなり、新規の方に声をかける余裕がありませんでした。「参加してみたいけれどきっかけがない」という方がいらっしゃるので、私たちからお声をかけられるよう努めていきたいと思います。

★今年度の方針

新型コロナウィルス感染拡大防止のために、４月からほっ友は休会をしています。活動内容の特性上、人と人との距離をとって活動することが難しいためです。対処法が確立され安全が見通せる時がきた ところで再開していきたいと思います。

輪になって、お茶をし、歌を歌い、語り合う、ほっ友の時間がどれだけ貴重なものだったかを今、感じています。早くその日が戻ってきてほしいと願っております。

★おわりに

現在、公園でほっ友への問い合わせに答えてくださっている皆様、いつもありがとうご ざいます。

今はまだ先の見通しが立ちませんが、再開できた際は、休会中も支えてくださった皆様への感謝の気持ちとともに、また新たな一歩をふみ出せたら、と思っております。

皆様のご理解とご協力をこれからもどうぞ よろしくお願いいたします。

（稲見得則）

生活相談班

炊き出し・夜回りで路上脱出を望む方の相談を受けて、生活保護や自立支援・仕事などにつなげる活動です。もちろん無料。その方の希望や経歴・強みを聞き取って、その方の望む生活につなげるためにワンストップの支援をこころがけています。

①年間の相談者数

・２０１９年度の新規相談者（電話やメールだけの相談は除く）は合計１３２人でした。毎月平均約１１人はほ例年通りです。

１人で２～４回の人もいるので延べの相談数はもっと増えます。

・相談の入り口

炊き出し　８５人。炊き出しは年２８回なので１回約３人の新規相談者です。

夜回り　３５人。

電話またはメール　１２人でした。

＊私達は池袋のローカル団体ですので、基本炊き出し・夜回りで出会った方を対象にしています。しばしば都内各地から「この方を助けてほしい」という電話が来ますが、全てに対応するとパンクするので、地元の支援団体か役所を紹介しています。

・月ごとの相談者数

通常の月は最低６人・最高１４人。春が多く夏にかけて減る傾向にあります。

一番多いのは年末年始の越冬期間中です。１２月２５人・１月２４人でした。２０１９～２０２０の年末年始はカレンダーの並びの関係で役所が閉まる期間が９日間と非常に長く、その間に仕事と持ち金が切れた多くの方が相談に来られました。

・年齢

平均年齢はちょうど５０歳。下は１７歳の家出少年から上は７７歳の路上生活者までで年代は様々。とくに１０代・２０代が８人もいたのがこの年の特徴でした。

ただし今のコロナ禍になってからは若い世代の相談者が更に増えています。

②支援内容

・生活保護申請同行　３６人

スタッフが同行して申請のお手伝いをします。申請のときは福祉事務所の相談員さんから生活困窮に至った原因や経歴を詳細に聞き取られ、それが辛くて申請をためらってしまう方も多いので、予め経歴や申請理由を１枚のプリントにまとめてそれを読んでもらって生活保護の必要性を訴えるとスムーズに申請が進み、宿泊先や医療ニーズについても交渉できます。

・自立支援センター申請同行

７人

就労を希望する人が６ヶ月間無料で寝泊まりして就労・貯金してアパートを借りようという公立の寮です。都内の５か所あって、豊島区から申請すると池袋駅北口の「豊島寮」になります。一人でいっても申請できるのですが、「役所に相談するのは不安」「もし一杯だったらどうしていいかわからない」という方には朝待ち合わせて同行します。

・就労先の紹介　１０人

すぐにでも仕事を始めたいという方に、就職先を紹介し、その場で面接を予約します。ＴＥＮＯＨＡＳＩに求人している会社が警備や建築などいくつかあって、ご本人の希望をきいて主に寮付きの会社を紹介します。

・他の支援　２７人

仕事が決まっているけれどそれまでを過ごす金がない人に宿泊費を支援する・債務問題などを解決するために弁護士を紹介・アパート探しのための不動産屋を紹介するなど

・相談のみ　２４

生活保護制度について質問を受けたり、医療や支援の情報提供やアドバイスなどをしました。

（清野賢司）

ハウジングファースト東京プロジェクト

障害を抱えながら路上生活をされている方への支援方法開発を目的として始まった「ハウジングファースト東京プロジェクト」は今年で丸10年となりました。参加団体は3団体から7団体に増えて多団体多職種連携の支援活動を行っています。

①シェルターの運営

「路上から直に入れる普通のアパート型シェルター」で、都内ではおそらく私たちだけ。2019年度TENOHASIは豊島区内の6室でシェルターを運営しました。

シェルターの利用期間は基本4ヶ月で、その間にアパート暮らしの練習をして、生活保護を利用して自分のアパートに移ることを目指します。

2019年度の1年間でシェルターを利用された方は合計15人。多くは以前から炊き出し夜回りで顔なじみになった路上生活の方で、「アパートに入りたい」という相談を受けた方です。

その中には池袋西口公園の改修工事のために居場所を失うことが確定なので「シェルターからアパートに行きましょう」とお誘いした方が3人いらして、これで池袋西口公園で野宿されていた方は全員が路上を脱しました。

ただし、部屋数が少ないのでシェルター入居まで短い人で半月、長い人で4ヶ月も待っていただきました。そのため2020年度に増設して10月現在では15室になりました（それでもすぐいっぱいになりますが）。

シェルターに入居してからは、生活保護申請・医療へのアクセス・住民票の設定・マイナンバーカード作成・携帯電話の購入などを支援します。

そして福祉事務所がOKを出したら自分のアパートを探してめでたく引っ越しとなりますが、2019年度内に自分名義のアパートに移れた人は目標12人に対して実際には7人でした。福祉事務所が元路上生活者に対して「生活の様子を見る」としてなかなかアパートOKを出さず、短くて4ヶ月、長いと1年以上待たされると言うことが大きな原因です。そこで途中から役所のOKを待たずに物件を探して申請するという方法もとるようになりました。

またそれ以外に「本籍地が見つからず住民票がなかなか設定できなかった」「豊島区内で暮らし続けるか郷里に戻るか決心がつかなかった」などの理由からアパート探しが遅くなった方もいらっしゃいます。

また、残念ながら病気で亡くなった方が一人。郷里からお兄さんが葬儀に参列されました。また事情があって出られた方が一人でした。

②生活と医療の支援

多くの方は路上生活で心身の病を抱えています。そんな方が気軽に相談できて訪問看護も受けられるのが「ゆうりんクリニック」、精神障害のある方が地域で暮らすことを支えるのが「訪問看護ステーションKAZOC」。おなじく精神障害のある方をグループホームと自助グループで支える「べてぶくろ（しずく）」、シェルター物件を管理運営する「つくろい東京ファンド」、アパート探しや修繕を手伝ってくれる“habitat for Humanity”コーディネートを担当する「世界の医療団」が現在のハウジングファースト東京プロジェクト参加団体です。（清野賢司）

鍼灸班

★活動内容

毎月第2・4土曜の炊き出しの日に、公園内にテントを張りベッドを設置して、はりとお灸を使った鍼灸治療を希望者に無料で提供しています。

★当日の動き

15:00東池袋四丁目はりきゅう院に集合、テント・ベッド・毛布・受付用のテーブルやカルテなどの器材をリヤカーに積んで出発、公園にて準備。

16:00受付・順番の抽選、治療開始。

18:00頃治療終了・片付け開始、撤収、はりきゅう院へ戻って片付け、

19:00頃活動終了。

★参加者

①鍼灸師：各回の参加者は1～3人ですが、患者さんの人数や状態には足りていません。

②受付係：1～2人でカルテや順番の管理、問診を行ないます。

③準備・片付け・運搬：鍼灸師と受付係で行ないますが、公園のおじさんがいつも協力してくださいます。人手不足の時はTENOHASIに応援要請し、手伝ってもらうことも度々あります。

★利用される患者さん

生保や年金受給、ネットカフェ・路上の方々と様々です。40～70歳代の男性が多いですが、20～30代の若者や女性の利用も少なくありません。

症状では、首・肩・背・腰・下肢、坐骨神経痛など身体各部の痛みやしびれの訴えが多く、その他に頭痛、むくみ、倦怠感、顔面神経麻痺、不安感など多岐にわたっています。鍼灸治療はWHOでも様々な症状や疾患に有効性があるとされているように、月に2回という限られた頻度ではありますが、東洋医学として様々な病状に対応しています。

★この1年での変化とこれから

一昨年から開始した患者さんの人数制限とくじ引きによる順番決定は継続しています。利用される患者さんは7、8人ですが、その他に待てずにキャンセルされたり受付時間外でのお断りが2、3人のこともあります。約2時間の治療時間内で、希望される患者さん全員の治療を行うには毎回3人の鍼灸師が欲しいところです。

春からは新型コロナ対策として、マスク着用・体温測定・コロナ用問診・ヒビスコール消毒などを行っています。また、路上やネカフェの患者さんには食料やマスクを鍼灸班独自で配布しています。これらの対策に必要な費用や材料はすべて鍼灸班及び東京路上鍼灸チーム関係者の寄付により賄っています。参加メンバーの中には介護医療従事者などの理由で活動への参加を自粛している者もいますが、幸い新メンバーも増え、工夫模索しながら活動しているところです。

これまで同様、準備片付けにTENOHASIからの手伝いをお願いしたり、雨に降られて濡れたテントをトラックに積載してもらったり、そして特に今後は新型コロナウイルス感染が疑われる症状などの患者さんの医療班への依頼、新しく路上に出たなど生活困窮の方の生活福祉相談への依頼、といった他班との連携が大切になってくると思います。

（嶋田恭子）

夜回り

毎週水曜日21時半、池袋駅前公園(通称うなぎ公園)を始点に夜回りはスタートします。

夜回りでは、毎月の支援情報が掲載されたチラシと、手作りのパンやおにぎり、ラスク(冬場はホッカイロも)、それらに加えて現在はコロナウィルス感染予防キット(ご寄付いただいたマスクを入れています。みなさまありがとうございます!)とチラシを配りながら、池袋駅周辺で路上生活をされている方々に声をかけ歩いて回ります。

手作りパンやおにぎりは、連携団体の世界の医療団スタッフとピアスタッフ(元路上生活をされていた方々)、ボランティアらが、和やかな雰囲気のなかで作っています。みんなの居場所、活動の場としても機能しています。現在は、コロナウィルス感染予防のため、参加者の人数制限をするなどの工夫を施しながら継続しています。

そうして作られた、みんなの愛情いっぱいのパンとおにぎり、ラスクは、まず21時半から池袋駅前公園にて配布します。約30名の方々が並ばれるのですが、その中にいつもご自慢の時計でスタート時間を正確に測ってくださる方がいます。「あと5分だよ!」「あと30秒!」と、愛嬌のある言い回しでタイムキーパーをしてくださるのです。遅滞なく配布できているのは、その方のおかげです。いつもありがとう○○さん☆

公園での配布を終えると、ボランティアが輪になって集まりミーティングをします。先週の振り返り、報告をして、各コースにボランティアの振り分けをします。そして、いけふくろうコース、有楽町コース(駅構内)、西口コース、椎名町コース、東口コースに分かれていよいよ出発です!

生活相談を希望されていたり、体調不良により緊急対応が必要な方には、生活相談スタッフ、医師が対応します(ハウジングファースト東京プロジェクトで連携している「ゆうりんクリニック」の医師も夜回りに参加されています)。

天気にも大きく左右されますが、駅前公園でのおにぎりの配布には25~30人前後が並ばれました。そして、ふくろうコース約5人、有楽町コース約20人、西口コース約5人、椎名町コース3~5人、東口コース20~30人程の方々が路上で出会います。ただし夜回りの時間には眠りにつかれている方が多い印象です。眠られているときは、起こさずにそっと枕元へおにぎりやチラシを置きます。特に東口は公園で野宿されている方が多いため、雨天時は屋根のあるところへ分散されるようで、人数の変動が大きくみられるコースです。

そこで出会った方からの相談を受けます。「相談したい」と自ら来られるかたもいれば、路上の方が「あそこにいる誰々がヤバいぞ(体調が悪いみたいだ)」と教えてくれたり、おにぎりを渡しながら体調不良や困りごとがないかをこちらからお聞きし、支援に繋がるケースもあります。

いくつか、ここ最近の夜回りでのお話しをしたいと思います。2月のまだ寒い頃、公園のベンチで着の身着のまま座っている青年にお会いしました。諸事情から住まいを無くしたあと、ネカフェでしばらくしのいでいたそうなのですが、所持金も尽き果てて公園に凍えながら座られていました。困ったときにどこに頼ればいいのかもわからず、にっちもさっちもいかなくなって路上生活に辿り着いたようでした。寒さをしのぐために夜通し歩いているというのです。いくつかご提案したなかでご本人のご希望から自立支援センターをご案内し、無事入所されました。その後ご本人から、「ここで生活を立て直したいと思います」と連絡をいただきました。

また、年明けに、高齢の路上生活者の体調不良による緊急対応が続きました。1人目の男性は、路上の仲間から「相談に行ってこい」と言われてこちらに来られました。少し歩くだけでも呼吸が荒くなり、明らかに医療にかかる必要が

ある状態でした。その日はアンブレラ基金から、ビジネスホテルに宿泊して休んでいただき、翌日生活保護申請へ。ケースワーカーさんと病院へ検査を受けに行かれるということで、そこでわたしたちは退席しました。このケースでは、ＴＥＮＯＨＡＳＩはそこで支援をバトンタッチすることになり、こちらにはその後の情報は入ってきていません。その方が治療を受け、回復に向かわれていることを願うばかりです。

２人目は、十年以上路上生活をされていた方からのＳＯＳでした。いつもおにぎりを渡しても断られるか、一言二言お返事をお聞きできるかどうかといった方だったのですが、ある日、いつもその方を気にかけている方から「立てなくなってＴＥＮＯＨＡＳＩを待っている」と、連絡が入ったのです。

車椅子を持ってその方のところへ行くと、１人で立つのもままならない状態でした。介助をしながら車椅子に座っていただくと、「痛い、痛い～」と、悲痛の叫び声をあげられていました。こちらの方も、その晩はアンブレラ基金からビジネスホテルで休んでいただき、翌日、生活保護を申請し、病院に同行しました。そして、検査を終えて入院が決まりました。

その後スタッフ数名でお見舞いに行ったのですが、コロナの影響でお見舞いは全面禁止となっており、ご挨拶はできずでした。残念ですが、いまは仕方ありませんね。差し入れの「大人の塗り絵」と「クロスワードパズル」、暇潰しになっているかな？

話しは少し戻るのですが、ビジネスホテルに着いたときに、その方のカバンの中がチラリと視界に入りました。カバンの中には、ＴＥＮＯＨＡＳＩのチラシがクシャクシャになって入っているのが見えたのです。長年スタッフが声をかけ続けても反応が薄かった方でしたが、このような時に「ＴＥＮＯＨＡＳＩが来る」のを待っていた、わたしたちの存在を真っ先に思い浮かべてくださったことは、この長い年月声をかけ続けたことは無駄じゃなかったのだと、関係性が築かれていたのだと、古参スタッフにとって特に感慨深いものがあったのではないしょうか。

その他にも、孤立無援で何らかの“生きづらさ”を抱えて路上生活されている方、借金をしてどうしたらいいかわからない、ＤＶから逃げてきた等々、さまざまな困りごとをみなさん抱えておられます。そして、コロナウィルスの影響で仕事の減少、失業、寮を出ないといけなくなって住まいが無くなった、仕事がみつからない、ネットカフェが休業したなどから困窮された方からの相談が増えました。

ＴＥＮＯＨＡＳＩのシェルターは、現在満室です。これから増やす予定ではありますが、個室シェルターが空くのを何ヵ月も路上生活をしながら待っていただいてくこともあります。

夜回りの活動自体としては、いままで全体のまとめ役的なボランティアに負荷がかかってしまっていたため、今後はそのようなことがないようにと、各コースのリーダーが、その日の報告と、翌週予測される人数(=おにぎりの配布数)をＬＩＮＥグループに知らせるようになりました。そうしたことで、まとめ役があれやこれやと考えて動いていたことを、みんなで共有し、意識を持って活動に参加するよう変化がみられました。

夜回りボランティアは、炊き出し時に行われるボランティアセミナーを受けていただいた後、希望者に参加していただいています。ボランティアスタッフには、元路上生活をしていたピアスタッフや社会人、大学生、主婦、現在も路上生活中の方などが一緒になって回っています。路上生活をされている方々と身近に接することができ、多くの気づきが得られる活動です。ぜひ、ご参加ください。

（平田聖子）

「助けたい」からではない
女子大生が路上支援に関わるワケ

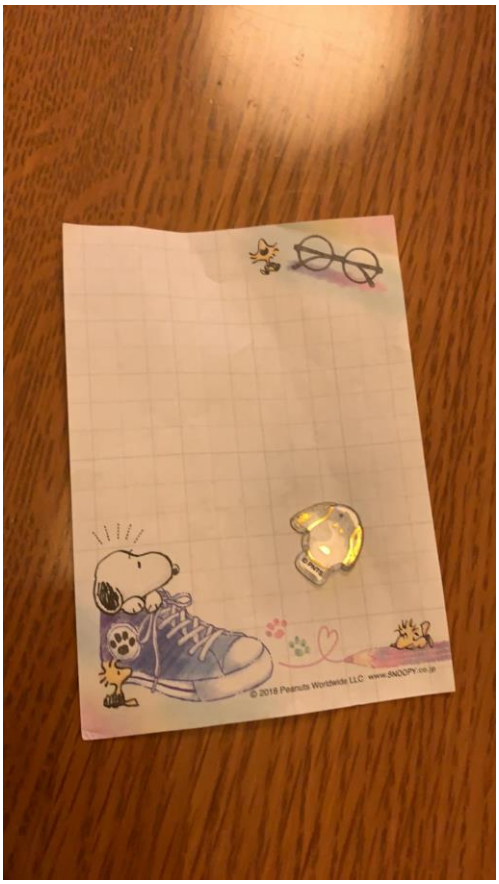
もとボームレスのおじさんたちと軽やかに楽しげに関わる学生さんが居ます。どうして？と思って、たまたまその学生さんの大学の講義に呼ばれたときにみんなの前で語ってもらいました。

はじめまして。社会心理学科4年の原田詩織と申します。

普段、TENOHASIの事務処理バイトをしています。他にも、複数のホームレス支援団体でパートやボランティアとして活動しています。一番お付き合いが長いのは、ビッグイシュー日本という社会的企業で、3年以上です。

私には忘れられない言葉があります。ビッグイシューのスタッフに「なんでホームレス支援に関心をもったんですか？」と尋ねたとき、そのスタッフが「路上で寝ている、一見身なりも整っていないおじさんも、お母さんのお腹からおぎゃあって生まれてきたんだと思うと、いてもたってもいられなかった」と言ったんですね。

ビッグイシューの事務所では販売者のホームレス状態の方がやってきて他愛のない雑談を交わしています。そのとき、今まで苗字しかしらなかった販売者さんのお名前がわかって、「綺麗な名前ですね」って私が言ったら「俺が生まれる時、お袋たちは女の子かと思って、女の名前考えたんだけど、男の俺が生まれて、この名前つけられたんだ」っておっしゃいました。いまは、彼を支えてくれる親類縁者の方もいないから、彼はこうやってビッグイシューを売っている。けど、彼にも子供時代があって、女の子か男の子かって周りにわくわくされながら生まれてきた。



おじさんたちは色んな人がいます。仲がいい人には優しいのに、仲が悪い人にはすごーく厳しい態度とる人。普段何考えてるかわかんないのに、クリスマス近くにコンビニで買ったケーキをやるよって言ってくれる人。ちょっとしたからかいにすねて、事務所に来なくなっちゃって、しばらくしたら何食わぬ顔してまたやってくる人。

面白くて好きなのが、スヌーピー好きなおじさんです。なんでかわかんないけど、彼はスヌーピーが大好きで、体中スヌーピーコーデなんですね。スヌーピーのキャップに

スヌーピーの缶バッジつけて、スヌーピーのワンポイント入ったジージャンに、ズボンにもスヌーピーのアップリケとかつけてて。カバンもスヌーピー。凄いスヌーピーなんだけど、なかなかオシャレにコーディネートしてる。「スヌーピーかわいいですね」って声かけると、シールの入ったカンカンを出してきて、その中のスヌーピーシールとスヌーピーのメモを10枚くらいを「あげるあげる」って言ってくれる。私キャラもの興味ないし、いらねえなって思うんですけど、気持ちがとっても嬉しいので受け取って、なんだかんだウキウキして、シールをスマホにつけたりしてました。

で、そんなおじさんと他のボーカロイドが好きなおじさんが事務所で雑談してました。ボーカロイド好きなおじさんが「俺オタクだから」と自嘲気味に言った時に、スヌーピー好きのおじさんが「俺、自分がスヌーピー好きになったときから、人がどんなもの好きであろうが絶対バカにしないって決めたんだ」っておっしゃったんです。偉いなって思いました。

こうしてみると、私たちが大学で出会う友達や先輩と重なる部分ありません？

「ホームレス」って名前の人はいません。みんなそれぞれ田中さんだったり、自分の名前があって、生きてきた歴史があります。路上で寝ていて、汚れていて、仏頂面でって感じでも、TENOHASIさんで人と関わったり、ビッグイシューで雑誌を売って常連さんたちと仲良くなるうちに、どんどんやわらかーい表情になる人もいます。

私は、そんな感じで、一見私とまるでちがうように見える人々のいいなって思うところも、なんだこいつって思うところも含めて、柔らかい心を知ることができるので、これからも路上支援に関わると思います。

原田詩織

2019／12／10

東洋大学「貧困と社会的排除/貧困論」にて

＊写真提供＆タイトルも

物資・資金のご寄付ありがとうございました。

コロナ禍で一気に多忙となり会報誌の発行が遅れ遅れになってしまいました。今号では 2019 年 11 月から 2020 年 9 月までに物資・資金をご寄付くださった方のお名前を感謝を込めて掲載いたします。

順不同・敬称略。マスクについてはあまりにも多くの方から寄付していただき、記録とお礼状発送事務で事務局がパンクしそうになったために、やむなく一部の方はお名前を割愛させていただきました。申し訳ありません。多くのお名前の中には、いつもの方も、初めての方も。TENOHASI は皆様に支えられています。

紙版の会報誌に、ご寄付くださった７３２人のお名前を掲載させていただきました。

Web 版では、個人情報保護のためご寄付くださった方々のお名前は割愛しています。

この写真は全国でマスクが払底していた 5 月のある 1 日に TENOHASI に届いたマスクです。コロナ禍でマスクが買えない時期もたくさんの皆様のご支援で路上の皆さんにマスクを配ることができました。本当にありがとうございます。

□　TENOHASI の活動

○炊き出し＆医療生活相談＆鍼灸マッサージ＆お茶会
毎月第２/第４土曜日　東池袋中央公園
○おにぎりと夜回り　　毎週水曜日　池袋駅前公園～池袋駅とその周辺
○ハウジングファースト東京プロジェクト
路上脱出・安定した地域生活への移行支援
参加団体：TENOHASI・MDM（世界の医療団）・べてぶくろ
あさやけベーカリー・訪問看護ステーションＫＡＺＯＣ
つくろい東京ファンド・ゆうりんクリニック
Habitat For Humanity・BaseCamp

□　活動資金のカンパをおねがいします！

郵便振替　00１90-8-2５9686　特定非営利活動法人ＴＥＮＯＨＡＳＩ
銀行振込　ゆうちょ銀行０１９(ｾﾞﾛｲﾁｷｭｳ)支店当座２５9686 トクヒ）テノハシ
クレジットカード決済　ホームページからお願いします。

□　物資カンパ

靴・カミソリ・食品（缶詰・レトルト食品）など
＊現在、衣類・お米は在庫が積み上がっているので募集を停止しています。
＊送り先：下の「発送元」欄参照

□　お問い合わせ

メール：TENOHASI ホームページの「お問い合わせ」から
電　話：090-1611-1970(事務局長　清野賢司)

特定非営利活動法人TENOHASI
会報第41号　2020/12/1発行
□ホームページ　http://tenohasi.org/
□メール　tenohasi@yahoo.co.jp
□facebook　https://www.facebook.com/tenohasi/
□twitter　https://twitter.com/tenohasi
印刷　アビーム(社会福祉法人復生あせび会)

発送元
〒177-0045
練馬区石神井台6-1-28
TENOHASI事務局
TEL 090-1611-1970

会報誌のｗｅｂ版をホームページにアップしています。
＊個人情報保護のためweb版では「ご寄付御礼」ページは削除しています。
「紙の会報誌は不要」という方は、お手数ですが上の「お問い合わせ」からご連絡ください。